

SY6-1

小児の発育と成長曲線～令和5年
乳幼児発育調査結果の活用

磯島 豪

国家公務員共済組合連合会 虎の門病院 小児科

小児の大きな特徴は、発育（growth）・発達（development）することである。発育・発達は、同じ意味のように使われることもあるが、発育は形や量に変化するという量的な変化を指すのに対して、発達は機能が成熟するという質的な変化を指す。

日本の発育値の基準は、乳幼児期の発育については厚生労働省による乳幼児身体発育調査、学童期については文部科学省の学校保健統計調査をもとに作成されてきた。日本の乳幼児身体発育値は、1940年に文部省の研究費によって全国調査が開始され、1960年からは厚生（労働）省による乳幼児身体発育調査として10年間隔で調査されている。学童期身体発育値は、1900年に生徒児童身体検査統計の名称で調査が開始され1948年に学校衛生統計、1960年に学校保健統計調査と名称が変更され、毎年調査されている。どちらの調査も半世紀以上にわたって行われている日本の小児の発育値の変化を示す貴重なデータである。乳幼児期の成長曲線については、乳幼児身体発育調査の結果により作成され母子健康手帳に反映され、乳幼児期から18歳までの連続した成長曲線の作成は、10年ごとに試みられてきた。乳幼児期から18歳までの連続した成長曲線については、成人身長 secular trend（年代ごとに成長が変化していく傾向）が終了した以降で肥満増加傾向が明らかになる以前の年度を考慮して、病院では2000年度調査結果をもとに算出した基準値が標準値として使用されている。

発育を評価していくことは、小児の健康を見守る上で欠かせないものである。発育には個人差があるので、基準となる成長曲線の目安から小児の発育が外れた場合に、必ずしも病気であるとは限らないが、病気を早期発見できる可能性があり、これらを上手く活用することは重要である。母子健康手帳で評価出来る年齢を超えた場合にも、成長曲線は病気の早期発見のきっかけになることが分かっている。さらに、病気以外にも小児についての社会的な問題点が判明することもある。新型コロナウイルス感染症の拡大の影響により延期されていた通算7回目の乳幼児発育調査が令和5年にこども家庭庁成育局母子保健課により行われた。本講演では、最新の乳幼児発育調査結果をふまえ、小児の発育と成長曲線について概説する。

SY6-2

多職種で行う成長曲線を利用した
乳幼児期からの生活習慣病対策青木真智子^{1,2)}、黒川美知子^{2,3)}、原 光彦⁴⁾¹⁾青木内科循環器科小児科クリニック、²⁾福岡市医師会保育園幼稚園保健部会、³⁾くろかわみちこ小児科クリニック、⁴⁾和洋女子大学家政学部健康栄養学科

非感染性疾患（non communicable diseases：NCADs）は動脈硬化性疾患やがんなど多岐にわたり、成人期の主な死亡原因となっている。その一次予防（健康教育と生活習慣の改善）は成人になってからではすでに遅く、乳幼児期から生涯にわたり行う必要がある。乳幼児の栄養・生活習慣を指導する上で、毎日多数の乳幼児に接する、かかりつけ医・園医の役割は大きい。成長曲線をどのように活用して指導を行うかは、実地場面での課題は多い。1) かかりつけ医の指導：5～6か月に開始される離乳食に関する指導、7～10か月頃の成長曲線での成長停滞症例における栄養上の検討が必要であると感じる。鉄、亜鉛、VitDなどの欠乏がみられるが、保護者は気づいていないことも多い。2) 保育園・幼稚園の園医としての指導：保育園は年2回、幼稚園は年1回の健診がある。その際に園児一人一人の成長曲線・肥満度曲線の記載を指導すると、幼児肥満ややせについての提言がしやすい。保育園・幼稚園教諭の成長曲線への理解と行政からの指導の必要性を感じる。3) 医師会を経由した集団での検討と指導：学校保健統計調査報告では、5歳の幼児肥満は、コロナ禍後増加の傾向にある。幼児肥満の増加は、そのまま学童期の肥満増加と連動している。福岡市医師会保育園幼稚園保健部会では、多職種（保育園・幼稚園教諭）との共同研究で3,4,5歳の肥満の出現頻度や、将来の肥満が生じやすいとされる早期adiposity rebound (AR) 出現頻度について検討をすすめている。その結果、保育園からは、幼児肥満への認識が高まったなどの感想を得た。さらに我々は「幼児肥満改善のためのアドバイス集」を作製し、福岡市医師会ホームページで公開している。幼児肥満へ介入するためには幼児の成長に関する多職種の意識を高める必要がある。学童期以降の小児生活習慣病予防健診（肥満とやせ）も福岡市医師会小児生活習慣病対策部会で行っている。小児に関わるすべての人が、乳幼児・小児生活習慣病対策に積極的にかかわらなければ、日本の未来は危ういと感じている。